

箕の製作から見てきた民俗技術の記録作成の課題

国井 秀紀

1 はじめに

箕は、主に穀物を選別することに使われ、弥生時代^(註1)から現在までの約2,000年も受け継がれてきた農具である。今回取り上げる箕は、藤と篠竹などを主材料とする「藤箕」と呼ばれるもので、その現状は、製作地がわずかな地域に限られ、職人たちは高齢で、しかも後継者がいないために年々減少する傾向にある。福島県も同様に危機的な状況にあるため、藤箕づくりの技術を早急に受け継ぎ、後世に伝えることが求められている。

筆者は以前行った縄文土器底部に見られる網代痕の調査^(註2)で、現在に残る材料の採取・加工方法や縄文時代と変わらない編み方などの技術が、考古学資料を解明する上で多くの手掛かりになることから、このような民俗技術が重要と感じた。その後、当館で保管している福島県南相馬市小高区の「おだかの箕づくり」の映像記録^(註3)をもとに技術復元に取り組み、平成28年1月に箕を完成させることができた(写真1)。

本稿では、『研究紀要2014』所収の拙稿^(註4)の続編として、箕の映像記録をもとにした復元製作から確認できることを整理し、復元が可能となる民俗技術の記録作成のあり方について検討する。

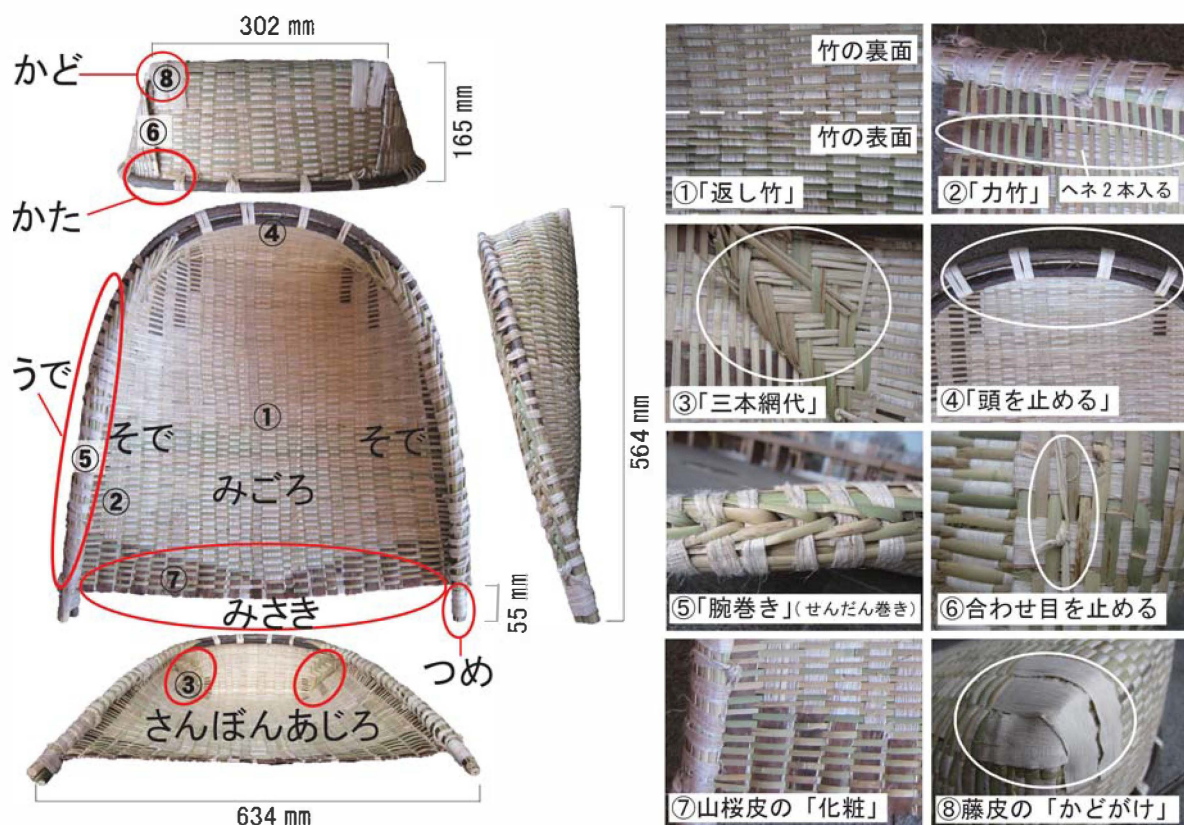


写真1 小高箕の各部の名称

2 映像記録による復元製作からわかること

(1) 箕づくりの取り組み

筆者は、「おだかの箕づくり」（以下、「小高の箕」とする。）の映像記録を撮影した当館職員と平成24年から、この箕づくり全工程の映像記録をもとに製作に取り組み、「材料の採取・加工」から「箕を編む・仕上げる」の工程を経て、写真1に示した箕を完成させることができた。その経緯については、福島県内に藤箕の職人がほとんどいないという緊急事態を知り、早急にその技術を受け継ぐ手立てを考えている中、筆者自身が箕づくりに挑戦するに至った。

今回の箕を完成させるまでには、小高の箕職人からの指導は受けず^(註5)に映像記録と報告書の確認、職人が製作した箕の完成品の観察を中心に行った。この他、特に難しい技術として竹を割ってヒゴにする方法については、竹カゴ職人等^(註6)にその技を見せていただいて覚えることができた。また、箕の道具の製作については、小高の箕づくり職人と同様の道具を野鍛冶職人^(註7)に依頼し、その他の弓竹や木太刀棒は、筆者が製作した。さらに、県内の藤箕の調査^(註8)からは、その製作方法や使用材料の違いなどが確認されることから、小高の箕の特徴をより多く見出すことができた。なお、本稿で取り上げる箕に関する用語等は、小高の箕づくりの映像記録で出てくる言葉を、そのまま用いることとし、これらの用語の説明を表1に示した。

表1 小高の箕づくりで使われる主な用語

みさき	箕の先端部分	合わせベネ	「みさき」を丈夫にするためにヒゴを重ね合わせる
みごろ	箕の中央部分	返し竹	弓竹に取り付けた藤皮の上下に挟むヒゴを裏返しに挟んだヒゴ
そで	箕の両側部分	敷き皮	藤皮の破け、寸足らずの場合の補充
つめ	箕本体から突き出た枠木の端部	あや拾い	両手で一本置きにヒゴを拾う
ハカマ	竹の皮	化粧	桜の皮を装飾として挟む
虎斑	2年ものの篠竹の皮に見られるまだら模様	力竹	箕の張りを良くするため「そで」両端部の藤皮の上に入れる2本のヒゴ
ウラ	てっぺん、先	三本網代	「みごろ」奥のコーナー部を、3本単位で編む網代編み
ヘネ	篠竹のヒゴ	とんび	箕を平面状に編んだもの
もみ洗い	取り終えたヒゴの鋭い角をとったり汚れをとる	肩止め	「とんび」の角を合わせてシントシを使い、藤の皮で縫い止める
天日干し	材料がカビなどで傷まないように乾燥させる	頭を止める	枠木となるヨツズミの中央部分の取り付け
弓竹	箕を編む縦方向の中心になる藤皮を挟む道具	腕巻き	箕の両側の枠木取り付け
止め竹	弓竹の両側に置いて横方向のヒゴを安定させる竹	かどがけ	補強のために藤皮をかぶせる

(2) 箕づくりからわかること

ここでは、小高の箕づくりで撮影した全工程の映像記録をもとに、筆者が実際に復元製作を行った中で、わかってきたことをまとめる。なお、箕づくりの材料の採取・加工については、『研究紀要2014』を参照していただきたい。

はじめに、箕づくりの工程を確認する。箕づくりでは篠竹（アズマネザサ）及びイトトリダケ（矢竹）・藤・山桜・ヨツズミ（ガマズミ）が材料として使用される。最初の作業となる材料の採取では、その時期、生育年数、太さと長さ、形状などの見分け方、切る位置などの知識が必要である。次の工程である材料の加工でも、その特性について豊富な知識が求められる。

続いて「箕を編む」作業では、はじめに、弓竹と止め竹の間にヘネ（ヒゴ）を通した（写真

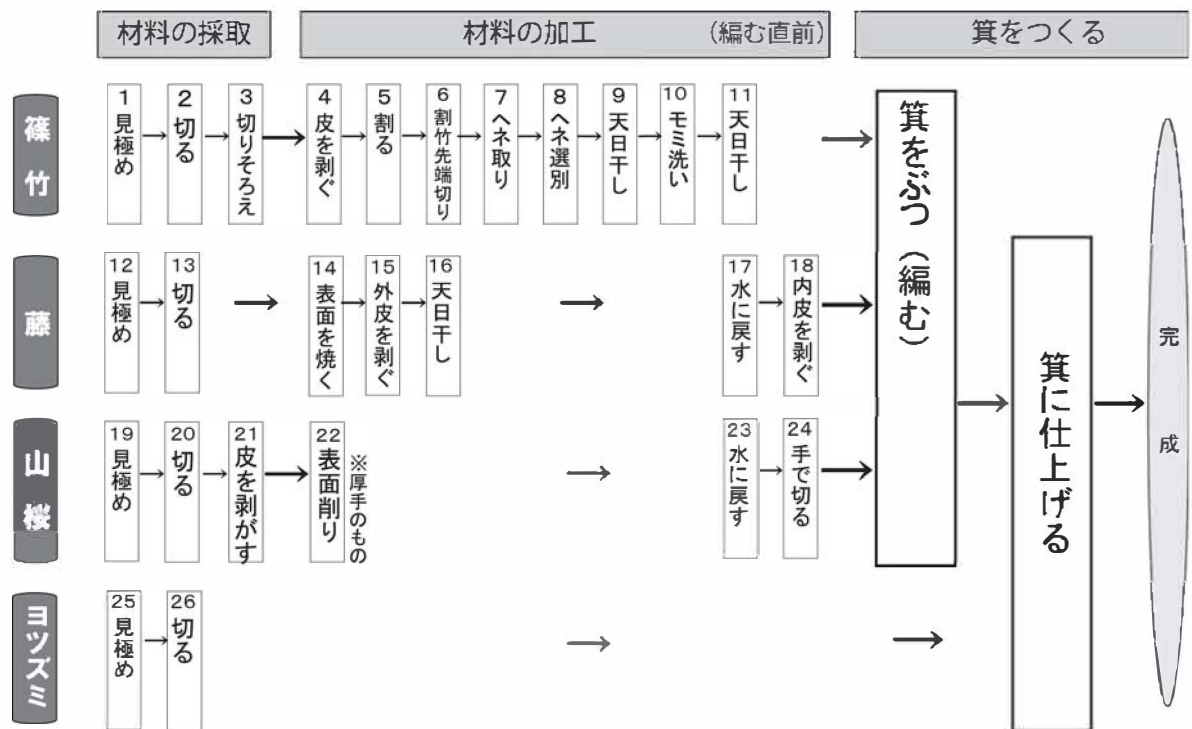
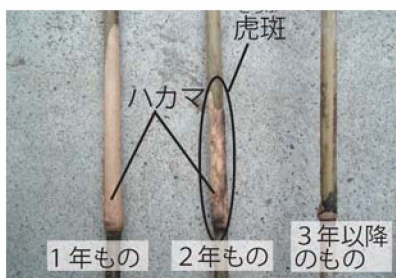


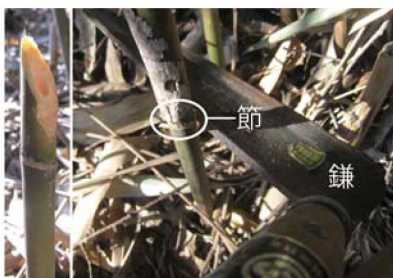
図1 材料の採取と加工の工程



図2 箕を編む・仕上げるの工程



① 篠竹 2 年ものの見分け方



② 篠竹の元側では節の上で切る



③ 篠竹のハカマ取りと左手の使い方



④ 篠竹の四つ割りと左手の押さえ方



⑤ 四つ割りした篠竹先端の裂き方
(上: 先端部のカット面、下: 先端部の裂き方)



⑥ 「だき剥ぎ」による篠竹のヘネ取り
※指先でヘネの厚さを感じ取る



⑦ 篠竹のヘネ取り後の天日干し
※ヘネは常に先と元がわかるようにする



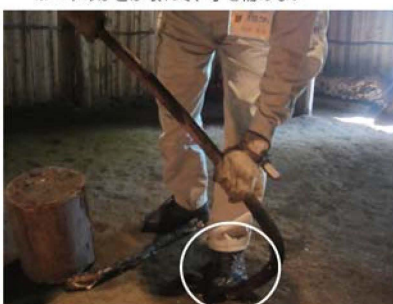
⑧ 篠竹のヘネのみみ洗い
※ヘネのかどが取れて、手を傷めない



⑨ 藤の見分け方 (左: 良い藤、右: 悪い藤)
※右上: 硬い皮と軟らかい皮が 2 重に重なり、使えない



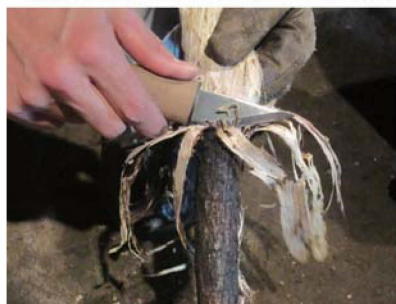
⑩ 藤の表面を焼き過ぎないように注意する
※藤の先端から湯気が出ると芋のような臭いがする



⑪ 藤の端部を地面に押しつけて皮を裂く



⑫ 藤の皮と芯を分ける
※芯を曲げながら引く抜くと皮が破けない



⑬ 焼いた藤の外皮を裂く
※焼くと皮が剥がしやすくなる



⑭ 藤の内皮を 3 枚に薄く裂く



⑮ ヨツズミと山桜の材料
ヨツズミ (上: 赤い箕をつける枝先、下: 樹皮)

写真 2 材料の採取と加工



写真3 簀を編む・仕上げる

3-②) 後、ヘネの間に藤皮を入れて編む(写真3-③・④)ことで、箕の本体である「とんぴ」(写真3-⑤)が完成する。その後は、「箕に仕上げる」工程に移り、かど部分から立ち上げて箕の形にして止める「肩止め」(写真3-⑦)を行う。次に、この状態に枠を取り付ける「頭を止める」(写真1-④・写真3-⑨)と「腕巻き」(写真1-⑤・写真3-⑩)を行うことで、箕の強度が増す。最後に立ち上げ部分を縫い合わせ、箕裏側のかどの補強「かどがけ」(写真1-⑧・写真3-⑬)・箕先部分の補強と「化粧」の山桜の皮を入れる(写真1-⑦・図2-33)ことにより箕の完成となる。

次に、映像記録の特徴について述べる。この映像からは、作業の流れなどの見てわかる点、撮影方向の問題や職人の作業が早すぎて見えにくいなどのわかりにくい点、職人の高度な技術や作業工程の記録漏れなどのわからない点を確認できる。そのため、実際に復元製作を行うことで、映像記録の内容はより具体的になる。それは、箕づくりを知らない筆者が、映像記録を繰り返し見て製作していく中での失敗から多くのことを学び、ヘネを取る・箕を編むなどの一連の作業を重点に行いながら全体の作業工程を理解することで、箕を完成させることができたからである。それでは、映像記録から「見てわかる点」、「わかりにくい点」、「わからない点」の3つに分けてまとめる。

「見てわかる点」としては、図1・2に示したように、大きな作業の流れが映像から確認できることである。これらの作業の流れは、映像を通して手の動きや、道具・素材等の扱い方といった細かい部分まで確認できることもある。たとえば、写真2・3では、それらの映像から



写真4 復元した箕づくりの道具

得られた細かい情報を、矢印や引き出し線、楕円等を用いて図示してみたが、こうした詳細な作業内容に関する情報は、技術の記録や継承に不可欠である。そのためにも、いかに「見てわかる」映像を残せるかが、非常に重要になってくる。

次に「見てわかりにくい点」については、撮影方向の問題や、職人の早業などが要因として上げられる。撮影方向の問題では、職人の作業を見やすい位置から撮影することが求められる。特に「箕に仕上げる」工程（図2-21～33、写真3-⑧～⑫）では、箕本体や箕と枠を固定するために藤皮（内皮）で止める際のシントシ（写真4-⑧）を刺す位置と抜く位置が逆方向になるため、2方向からの撮影が必要となる。同様なケースとして、箕の裏面にあたる「かど」の補強を行う「かどがけ」（図2-29、写真3-⑬）では、ツバグシと呼ばれる箕づくり特有の道具（写真4-⑦）を使い、藤皮をヘネの間に差し込んで「かど」を覆う際、箕を逆さにした状態で、藤皮がその脇から上面へと何度か移動するため、2方向からの撮影が必要となる。また、職人の早業である手さばきについては、箕を編むために篠竹のヘネを交互に拾い上げる「あや拾い」（図2-12、写真3-④）がある。この作業は、目にも止まらぬ速さであるため、映像記録を見ても職人の指の動きが全く見えない。この作業を映像で記録するには、職人の視線側とその反対側の撮影が求められ、また指の動きが確認できるようなスロー映像も必要と考えられる。また、映像記録で上手く表現できない部分については、併せて、映像記録を補完するための静止画や図解で説明する報告書等の作成も必要となろう。

続いて、映像記録から「見てわからない点」は、作業工程全体の中で記録漏れとなっていた部分、職人の熟練の技が求められる「篠竹を割ってヘネにする工程」と「箕を編み込む工程」部分である。映像の記録漏れとなっていたものには、箕を編むための中心をとる弓竹に藤皮を取り付ける作業（図2-1、写真3-①）、箕の先端にだけ2枚のヘネを重ね合わせて丈夫にする「合わせベネ」の方法（図2-3・写真3-②）、山桜の皮の採集・加工（図1-19～23）といった工程が確認された。また、職人の熟練の技が求められる「篠竹を割ってヘネにする工程」と「箕を編み込む工程」については、次項で述べることにする。

以上、小高の箕づくりの映像記録の問題点を「見てわかる点」、「わかりにくい点」、「わからない点」の3つに分けて整理した。その上で、実際に筆者が製作工程を再現してみたが、映像記録を見て作業工程の流れが「わかる」とこと、実際にそれを再現して「できる」とことは大きく異なる。映像記録で作業工程の流れがつかめたとしても、作業工程の一つ一つで重要なポイントは、実際に箕を製作してみないとわからない点が多く、映像記録だけでは、箕づくりの作業工程をすべて忠実に再現することはできないのである。

（3）製作からわかることをどのように伝えるか

職人の世界では、技は「見て体で覚えるもの」だと言われる。ここでは、前項で示した映像からの判断や製作する上でも難しい「篠竹を割ってヘネにする工程」と「箕を編み込む工程」の一連の作業を、できるだけ言葉で説明したい。それによって、少しでも映像記録の不完全な部分を補完できるのではないかと考える。

「篠竹を割ってヘネにする工程」（図1-5～8、写真2-4～6）では、篠竹を均一に四分割する方法と均一の厚さにする技術が求められる。この作業は、映像を繰り返し見て実際に行うことで、その作業に近いことはできるが、実際にどのような方法でどう行うかを職人に確認しないとできないものと考えられる。このため、筆者は、竹細工や竹かご職人の方よりその技術を実際に見せていただき、竹を均一の幅に割ってヘネも均一の厚さにする方法を知ることができた。

まず、篠竹の割り方は、はじめに両刃の小刀で竹の芽の中心を割り、竹を均等に二分割・四分割していく（写真2-④）。その際に竹の割れ方が均一でない場合には、手首で小刀の傾きを変えることで厚さの調整ができる。竹を割る重要なコツは、厚さを薄くしたい方に小刀の峰を傾けるだけで調整ができる。その後、分割した竹からヘネを取る「だき剥ぎ」（写真2-⑥）では、前述したことと同じ要領で、小刀を持つ手の手首を上へ上げることでヘネを薄くすることができ、またヘネの逆側になる使用しない部分の竹を左手で下側に向けることで、ヘネを厚くすることができる。このように、ヘネ取りでは、両手の指先でヘネの厚さを感じながらその調整を行う必要がある。ヘネの厚さが均一かどうかは、ヘネの両端を合わせて円をつくったときに正円形になるかどうかで確認できる。きれいな円にならないければヘネの厚さが均一になっておらず材料とし使えない。

次に、「箕を編み込む工程」（図2-8～12、写真3-③・④）は、映像を繰り返し見ることで、ヘネの間に藤皮を木太刀棒で編み込む手順がある程度わかる。例えば、箕を編む作業では、図2-8～12に示した一連の作業が8回繰り返され、写真3-⑤で示した順序に編んでいく。この中には、一連の同じ作業の中でも見落としやすい重要な点がある。例えば、写真3-③のように藤皮を編み込む際の力加減やこの藤皮を真直ぐにするために左手で藤皮の手前側を押える（写真3-③）こと、差し込んだ藤皮の端部を職人が足で押さえて固定することなどがある。この他にも、職人の体全体の動き、目の動き、次の動作に移るタイミングなどのような無駄な動きが無い職人の細部の動きなどの確認も、作業を理解する上で重要となる。

このように、映像記録ではわからない一連の作業を確認したが、実際に複元製作を行うことによって、その工程の一つ一つの作業が理解でき、また、作業を行えば行うだけ箕づくりの新たな発見が得られ、作業をより具体的に行うことができる。そのため、映像記録ではわからない問題点に気づいたときに、その都度メモに残すなどして整理し、何がわかったか、あるいは分からないかを明らかにしておく必要がある。それが、箕づくりの技術復元と継承への近道になる。と同時に、技術習得や練習等に役立てる新たな映像記録の作成にもつながると考える。

3 復元可能な映像記録作成のために

（1）箕づくり映像記録とその現状

今回の製作に使用した「小高の箕」の全工程からなる映像記録は、平成17年12月5日～同19年1月24日の期間、10数回にもわたって取材・撮影を行った約6時間にも及ぶものである。この他、映像記録のダイジェスト版として約25分のDVDにまとめられたもの^(註9)や同時に

表2 映像記録等の内容比較

○: 確認できる、—: 確認できない

製作			小高の箕		東和の箕		木積の箕		太平の箕		論田の箕
材料	工程	製作での確認事項	写真図版	全映像	映像	報告書	映像	報告書	映像	報告書	報告書
材料の採取と加工	篠竹・矢竹・イタヤカエデ	1 採取時期		—	○	○	—	○	○	○	○
		2 使用する材料の特徴と年数	写真2-①	○	○	○	○	○	○	○	—
		3 長さ・太さ		○	○	○	○	○	○	○	○
		4 ウラ(先)と元の切る位置	写真2-②	○	○	○	○	○	○	○	—
		5 皮を剥ぐ手順		○	○	—	○	—	○	—	—
		6 回しながら皮を剥ぐ	写真2-③	○	—	—	○	—	○	—	—
		7 竹の目を割る方法		○	○	○	○	○	○	○	—
		8 分割する道具と手首の使い方	写真2-④	○	○	—	○	○	○	○	—
		9 材料を持つ指の状態	写真2-④	○	—	○	○	—	○	○	—
		10 分割した竹の乾燥とその期間		—	—	—	○	○	—	—	—
		11 ヘネ取りのため分割した竹の先端のカット	写真2-⑤	○	○	○	○	○	○	○	—
		12 ヘネ取り方法		○	○	○	○	○	○	○	○
		13 指先で感じる厚さの調整	写真2-⑥	○	○	—	○	—	○	○	—
		14 ヘネ乾燥後のからみ・水洗いで角をとる	写真2-⑧	○	○	○	—	○	—	—	—
		15 ヘネの選別(箕を編む直前に行うこともある)		○	—	—	—	○	○	○	—
	フジ	16 採取時期		○	—	○	—	○	—	○	—
		17 見分けかた(横シワのものが良い)	写真2-⑨	○	○	○	—	○	○	○	—
		18 長さ・太さ		○	○	○	○	○	○	○	○
		19 藤を畑に埋め、3ヶ月後に掘り出して洗う		—	—	—	○	○	—	—	—
		20 藤の表面を焼く	写真2-⑩	○	○	○	—	—	—	—	—
		21 焼き上がりの判断	写真2-⑩	○	—	—	—	—	—	—	—
		22 切れ込みを入れ、皮が割れないように芯を抜く	写真2-⑫	○	—	○	○	○	○	○	—
		23 外皮を剥ぐ	写真2-⑬	○	○	○	○	○	○	○	—
		24 内皮の乾燥		○	○	○	—	○	○	○	—
		25 内皮を使用前に水に戻して剥ぐ	写真2-⑭	○	○	—	—	—	—	○	—
		26 芯の外皮を薄く剥ぐ		—	—	—	○	○	—	—	—
		27 桧木(ガマズミ・孟宗竹・根曲竹)採取・加工	写真2-⑮	○	—	○	—	○	○	○	—
		28 山桜の皮採取・加工	写真2-⑮	—	—	○	○	—	—	—	—
箕を編む	編む準備	29 箕の中心をとるための「弓竹」等を使用する	写真3-①	○	○	○	○	○	○	○	○
		30 「弓竹」に藤皮を固定する方法	写真3-①	—	—	—	○	○	○	○	—
		31 箕を編むためにヘネを挟んで並べる	写真3-②	○	○	○	○	○	○	○	○
		32 「弓竹」の両側に「止め竹」を置く	写真3-②	○	○	○	—	○	○	○	○
		33 箕先端のヘネを2本合わせた「合わせベネ」	写真3-②	—	—	—	○	○	—	—	—
		34 藤皮先端にヘネを挟むヒゴの置く位置		○	○	—	○	—	○	—	—
		35 ヘネを途中で裏側に交える「返し竹」の位置	写真1-①	○	—	○	○	○	○	○	—
		36 編みやすくするためヘネに水分を与える		○	○	○	○	○	—	○	—
		37 ヘネの間に挟んだ藤の皮を木太刀棒で締める	写真3-③	○	○	○	○	○	○	○	○
		38 編む前にヘネを両手で交合に拾う「あや拾い」	写真3-④	○	○	○	○	○	○	○	○
	編む	39 裂けた藤皮をふさぐため別の藤皮を上に乗く		○	○	○	—	○	—	—	—
		40 編み込んだ藤の皮両端の固定の仕方		○	—	○	○	○	—	○	—
		41 余分な藤の皮を切る		○	—	○	○	○	—	○	—
		42 角の部分をつくる長さの寸法を測る		○	○	—	—	○	○	○	—
		43 山桜の装飾を入れる「化粧」		○	—	○	○	○	○	○	—
		44 箕に張りをもたせるために「力竹」を入れる	写真1-②	○	○	○	—	—	—	—	—
		45 あや拾い→藤皮入れ→打ち締める一連の編み方		○	○	○	○	○	○	○	○
		46 立ち上がり部分の網代編みの方法	写真1-③	○	○	○	○	○	○	○	○
		47 「とんび」(箕を編んだ本体部分)の完成	写真3-⑤	○	○	○	○	○	—	○	—
		48 桧木の太さをそろえる		○	○	○	○	○	○	○	—
箕に仕上げる	形づくり	49 2本の桧木の整形		○	○	○	○	○	○	○	—
		50 編んだ箕に水分を与えて柔らかくする		○	○	○	—	—	—	○	—
		51 腕の部分になる余分なヘネを切る	写真3-⑥	○	○	○	○	○	○	—	○
		52 立ち上がり部分の縫い合わせる「かた止め」	写真3-⑦	○	○	○	○	○	○	○	○
		53 桧木を箕にはめる	写真3-⑧	○	○	○	○	○	○	○	○
		54 肩部分の桧木を固定する「頭を止める」	写真1-④	○	○	○	○	○	○	○	○
	桧木の取りつけ	55 「腕巻き」で巻く皮のつなぎ方		○	—	—	—	○	—	○	—
		56 「腕巻き」で藤皮を巻く間隔	写真3-⑩	○	○	○	○	○	○	○	○
		57 「腕巻き」際、振じれないように指で補助する		○	○	—	○	—	—	—	—
		58 「腕巻き」の方法の一つの「せんだん巻き」	写真1-⑤	○	○	○	—	○	○	—	○
		59 ツメ先の巻き方とその処理		○	○	○	○	○	○	○	○
		60 「かど」に藤皮を取り付ける「かどがけ」	写真1-⑧	○	○	○	—	○	○	—	—
		61 箕先端部に山桜の皮を入れる	写真1-⑦	—	—	—	○	○	—	—	○
修理	ヘネ入れ	62 ヘネ折れ部の付け替え	写真3-⑪	○	—	—	—	—	—	—	—
		63 箕本体の藤皮交換(ツバグシ使用)		○	—	—	—	—	—	—	—
		64 腕の藤皮交換(シントシ使用)		○	—	—	—	—	—	—	—
道具	箕先端	65 箕先端の「合わせベネ」交換		○	—	—	—	—	—	—	—
		66 道具について	写真4	○	○	○	—	○	—	○	—
		67 道具の寸法等		—	—	○	—	○	—	○	—

※製作に重要な確認事項の項目で、筆者が復元製作を行って難しいと感じた作業については、網点で示した。また、/の斜線については、行われていない方法である。

記録調査したデジタルカメラによる静止画像も残されている。このような静止画像は、製作の際の動画映像からではわからない点の確認などに参考になった。

このような箕づくりの映像記録は、「小高の箕」以外に、福島県二本松市太田地区の「箕をつくる」^(註10)、千葉県^{そうさ}匝瑳市の「木積^{きづみ}の箕づくり」^(註11)、秋田県秋田市の「太平黒沢^{たいへいくろさわ}の箕づくり（秋田のイタヤ箕製作技術）」^(註12)等がある。この他、報告書のみ刊行されている富山県氷見市^{ろんでん くまなし}「論田・熊無の藤箕づくり」^(註13)も知られている。これらの箕の製作地における技術は、福島県内を除いていずれも国の重要無形民俗文化財に指定されている。

ここでは、表2に示した製作確認事項の項目に従い、小高の箕づくり全工程を撮影した記録と、各地域の箕づくり映像記録（ダイジェスト版）とそれらに関する報告書等の内容について比較する。その結果、表からは、「小高の箕づくり」の全工程の映像記録が他のダイジェスト版映像記録やそれらの報告書を比べ、情報量が非常に多いことが明らかである。また、映像記録内容の比較からは、特にダイジェスト版の映像記録の多くに、表2の左上にある「製作に重要な確認事項」で確認出来ないものが多く含まれていることもわかる。この表により、映像記録（ダイジェスト版）とその報告書の内容の確認では、これらがそれぞれ単独であるよりも、互いにその内容を補完している状況も確認できる。そのため、映像記録の作成では、映像で表現しにくい部分を補足できる冊子等の報告書を作成することが望ましい。

この他、映像記録から内容の比較を行うことで、同様な箕づくりの作業でも、材料の加工や箕の各部分での材料の違い、箕の編み方や立ち上がり部分の縫い合わせ方などの製作手順の違いが確認できる。また、箕を製作するための道具についての説明が少なく、その製作については、ほとんど触れられていないことが多い。箕そのものや、製作工程だけでなく、製作に用いる道具やその材質、調達方法などについて、併せて記録しておく必要がある。

以上のことから、他地域との製作の比較からは、その違いを見分けられるようになり、小高箕の特徴をより強く感じる事ができた。また、全工程の映像記録は、その情報量が豊富なため、箕の製作及び技術の習得、技術の伝承などには非常に役立つものである。

（2）復元可能な映像記録にするために

ここでは、映像記録を撮影するための準備として、箕の復元製作から得られた情報や各地域の箕づくりの映像記録の内容をまとめたい。



写真5 木積箕づくり保存会の活動（上）と映像記録撮影の様子（下）（平成28年1月）

箕の映像記録を撮影するためには、はじめに、大きな流れと詳細な流れ（図1・2、表2の確認項目）の製作工程等を確認したい。また、職人から確認したい情報については、撮影の事前の確認（採取時期、使用する材料の年数、太さと長さ、材料の形状などの見分け方など）し、職人からの聞き取り漏れがないようにしたい。実際の撮影では、全工程の記録を前提とし、事前に準備した確認する情報を職人の生の情報として入れる方法（対話形式またはインタビュー式）、映像上にも文字として入れる方法（作業工程の名称や作業内容など）、ナレーションとして入れる方法がある。その中で、撮影する箕の特徴を示す部分（各材料の使用箇所、「返し竹」（写真1-①）の位置、箕の中心の取り方、箕を編む手順、縫い合わせ方法、腕巻の方法など）、職人の早業への対応（スロー・コマ送りなど）、見えない部分の撮影（アングルを考えて、2方向からの撮影など）、見てわからない部分（一連の工程を撮影する）などの記録を行いたい。この他、映像を補完するための報告書の作成やデジタルカメラによる詳細な撮影も併せて行いたい。

この他、現在、国立文化財機構東京文化財研究所では、木積の藤箕製作についての技術習得やその確認に役立つ記録の作成を目標とし、映像記録の製作を行っている^{（註14）}。このような取り組みを行う撮影現場に筆者も同行させていただいた。その際、筆者は、担当者が撮影事前の詳細な打ち合わせを行った後、作業前やその合間に職人からの聞き取り調査や作業上の確認を行い、また撮影に関して、職人の体の動き、職人が行う音、職人の早業等の記録方法などについて確認を行う姿を目にすることができた。ここでの東京文化財研究所の活動の様子は、映像記録を撮影するための取り組みや考え方などについて、本稿を作成する上で非常に参考になった。

このように、映像記録の撮影では、箕づくりについての事前に内容を理解し、また実際の撮影現場では、限られた時間内に撮影等を行うため、作業に対する柔軟な対応により撮影することが求められることを確認することができた。

4 おわりに

これまでの箕の複元製作の取り組みでは、職人の指導を受けない代わりに、多くの方からの助言があって箕の製作を終えることができた。その結果として、箕づくり全工程の映像記録と製作者の熱意があれば、ある程度まで箕を製作できることが確認できた。しかし、これは、箕づくり職人の技の一部にすぎないと考えられる。今回の製作で特に強く感じたことは、同じ作業を繰り返す行うことで、新しい発見が次々と確認され、それが次の作業に行かされていくことである。これが、職人の技につながるものと改めて感じることもできた。

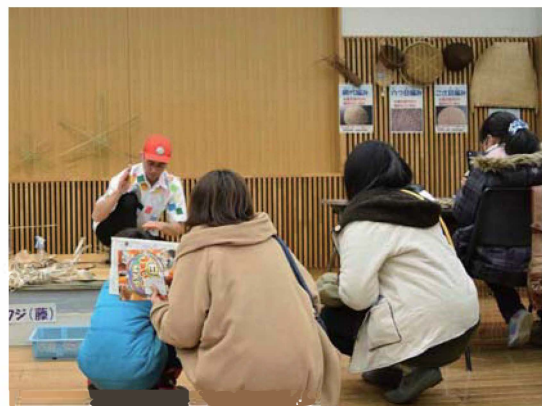


写真6 まほろん感謝デーでの「わくわくニイさん実演」（平成27年12月）

本稿については、映像記録の作成に対し、まだまだ不明な点も多く、これに対する課題もある。今後は、箕づくりをさらに続け、新しい箕づくりの技術を体で覚えながら、わかりやすい箕づくりの技術を探り、その継承についても積極的に取り組んでいきたい。

また、当館での取り組みとしては、平成 27 年 12 月に実施したイベント「まほろん感謝デー」、平成 28 年 1 月のイベント「まほろん冬まつり」で、箕づくり・かごづくり実演及びこれらの体験も行ってきた。このような民俗技術の継承を目的とし、今後もまほろんの体験活動に生かしていきたいと考えている。

< 註 >

- (註 1) 弥生時代の箕は、兵庫県本山遺跡と玉津田中遺跡、大阪府鬼虎遺跡、奈良県唐古・鍵遺跡と坪井遺跡、滋賀県霊仙寺遺跡、静岡県登呂遺跡、石川県西念・南新保遺跡などから出土している。
- (註 2) 福島県文化財センター白河館 2013 「縄文土器底部に見られる網代圧痕の素材検討」『研究紀要 2013』公益財団法人福島県文化振興財団
- (註 3) 福島県が平成 17 年～同 19 年にかけて実施した「福島県民俗技術調査」で、現在の（公財）福島県文化振興財団が南相馬市教育委員会等の協力により撮影した映像である。
- (註 4) 福島県文化財センター白河館 2015 「記録映像から復元する箕の製作技術」『研究紀要 2014』公益財団法人福島県文化振興財団
- (註 5) 小高の箕職人の方は、東日本大震災による福島第一原子力発電所の事故により、現在、南相馬市鹿島区に避難されている。箕づくりのために材料を採取していた飯舘村が、避難指示区域に指定され、材料の採取が行えないため、現在は箕づくりを行っていない。
- (註 6) 筆者が箕の製作にあたり、白河市在住の菊地清男氏から篠竹のひごづくりや刃物の使い方など、いわき市小名浜の西山昭一氏からはマダケの見分け方やその特性等のご指導をいただいた。筆者の度重なる訪問にも、多忙な中を対応していただいたことに、深くお礼申し上げます。
- (註 7) 筆者が箕の製作に使用した道具の一部（『研究紀要 2014』p 38 に示した竹割りナタ・小刀・シントシ・ツバグシ・鎌）は、いわき市上遠野町在住の野鍛冶職人長谷川昭三氏（平成 28 年 3 月現在、87 歳）に依頼して製作した。竹割りナタ・小刀・鎌・シントシ・ツバグシの道具製作に際し、筆者の無理な依頼を快く引き受けていただいたことに、深くお礼申し上げます。
- (註 8) 藤箕の調査では、南相馬市、二本松市、いわき市、古殿町、相馬市、双葉町の箕を約 50 点確認し、全て調査カードを作成した。その結果、製作者がわかるものは 3 点に限られたが、その地域によって使用する材料や製作方法の違いが見られることを確認できた。また、この調査に伴い、箕の修理情報や南相馬市と二本松市以外にも、いわき市に箕の製作者がいることも確認できた。
- (註 9) 南相馬市教育委員会 2007 『おだかの歴史 資料 1 おだかの箕づくり』
- (註 10) よなべの会 2006 『技の記録 1 [箕をつくる] 北阿武隈におけるものづくりの技を記録保存する仲間』
- (註 11) 千葉県伝統文化再興事業実行委員会 2005 『千葉県匝瑳市 木積の箕づくり』
- (註 12) 東北芸術工科大学東北文化研究センター 2008 「秋田市太平黒沢の箕づくり」『研究紀要 7』
- (註 13) 氷見市立博物館 2012 「藤箕づくり」『氷見の手仕事』
- (註 14) 国立文化財機構東京文化財研究所ホームページの『活動報告 (http://www.tobunken.go.jp/index_j.html) 』 2015.9 「民俗技術の映像記録制作事業—木積の藤箕製作技術をモデルケースに」

【写真出典】

- ・写真 1・3・4・5…筆者撮影
- ・写真 2—①・②・⑦・⑨・⑮…筆者撮影
- ・写真 2—③～⑥・⑧・⑩～⑭…当館職員撮影
- ・写真 6…当館職員撮影